

《旭焼》の絵付技法について

明治時代前期における窯業と絵画の関わりの一例（要旨）

松浪千紘

本研究は、明治16年（1883）から同29（1896）年までのわずか13年間に製作された陶器《旭焼》の絵付技法についての検証を中心とする。ドイツ人科学者ゴットフリート・ワグネル（Gottfried Wagener, 1831-1892）によって創始された旭焼は、当時国内外で高い評価を受けていたが、製作に関する記録は少なく、製作終了後にその技法が受け継がれることもなかったようである。先行研究では素地の成分や、製作に関わった人物らが取り上げられてきているが、旭焼そのものの技法は部分的な言及に留まり、製作工程の全貌は判然としない。今回、旭焼の復元を目的とした合同実験に参加し製作技法の検証実験を行う機会を得た。実証的手法による旭焼の製作工程の検討を通し、ワグネルが旭焼を生み出したことの意義を考察する。

明治初期、西洋技術の流入により日本のあらゆる技術が発展した。万国博覧会への参加やヨーロッパにおけるジャポニズムの流行などの影響もあり、輸出産業としての美術工芸が日本で注目された。当時の製造業に先進的な西洋科学技術を取り入れ近代化に貢献した人物がワグネルである。特に窯業における功績のひとつが旭焼である。旭焼製作の目的は、貫入のない白い素地に、日本あるいは中国の絵画を粉本とし精緻に写した多彩な釉下彩絵付を表し、欧米人に「日本上流の美術」を知らしめることであった。国内外の展覧会での受賞歴や、宮内省へ献上したという記録から高い評価を受けたことがわかる。円山応挙や徹宗などの作品が原図とされ、狩野派画家荒木探令が携わったという記録が残されている。

絵付に焦点を当てると、当時の関係者による記録から旭焼絵付に「蠟」「膠水」を使用した可能性が読み取れた。また、日本に現存する最大級の旭焼コレクションを所蔵する信楽窯業技術試験場において旭焼タイルコレクションの調査に参加した際、専門家らによる議論において絵付の際に「蠟抜き」によるマスキングと「吹き付け技法」による着彩がなされた可能性が指摘された。

そこで、これらを積極的に採用し「蠟抜き」「（膠水を使用した）ドーサ引き」「吹き付け」などを含む製作工程の一仮説を立案し、蠟及び膠水試用のための筆者による予備実験、さらに本学日本画専攻川嶋研究室・同学芸術学専攻畑中研究室合同で行われた旭焼絵付復元実験への参加を通し、検証を行った。予備実験並びに合同実験で各技法をいくつかの条件で比較したのち、合同実験で旭焼タイル絵付の復元が試みられた。復元の工程は、ドーサ引き、蠟抜き、下地着彩ののちに蠟の除去のためのカラ焼きを行い、再度ドーサ引きしたのちに着画、施釉、焼成という流れである。着彩・着画の際に使用した顔料は本実験においては膠水で溶いて使用した。この実験から、旭焼絵付の復元が日本画家との協力によりある程度可能であるという結果が得られた。従来、旭焼への日本画家の関わりは文献記録を元に指摘されてきたが、今回の実験をこの記録と合わせ考えると、旭焼製作に日本画家が参加したと考えることも可能な結果となった。

当時ヨーロッパにおいても《セルヴィス・ルソー》（1866-1938）など日本画を原図とする陶磁器が生み出され人気を博していた。ワグネルが日本の美術工芸を牽引していたこと、彼の没後間もなく旭焼製作が終了していること、旭焼が海外需要向け製品としての一面を持っていたことなどを鑑みると、旭焼はワグネルが日本で見せた「ジャポニズム」の一翼と捉えられるのではないだろうか。今後さらに調査を進め、旭焼の製作工程や製作終了に至る背景などを検討しながら、旭焼の歴史的な位置付けや今日における評価を考えていきたい。